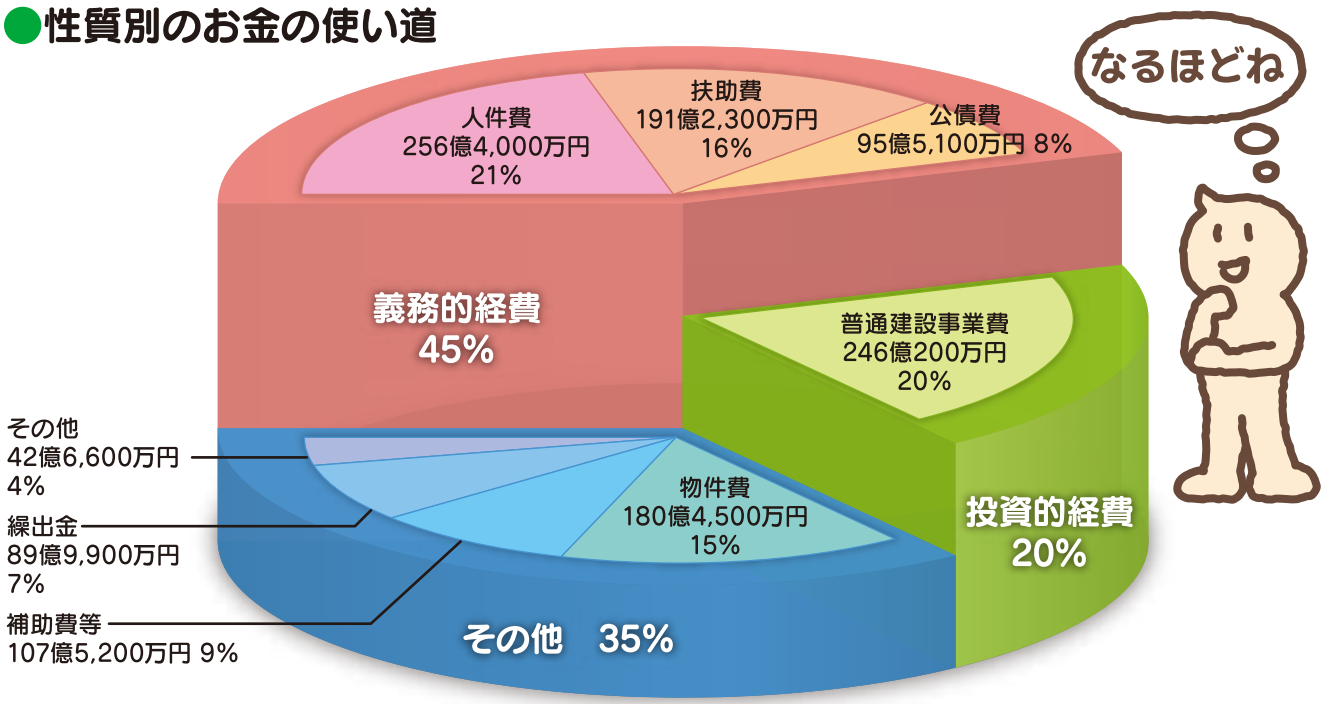
3 藤沢市の台所事情は?

1 今度は平成20年度普通会計決算から藤沢市の台所事情を見てみましょう。

●性質別のお金の使い道



扶助費
生活困窮者、子ども、高齢者、障害者などを援助するために使われます。

公債費
国や銀行などから借り入れたお金の返済に使われます。

普通建設事業費
道路、橋りょう、公園、学校などの社会資本の整備に使われます。

補助費等
下水道事業や病院事業に対する負担金、幼稚園や保育所への補助金などに使われます。

繰出金
国民健康保険事業や土地区画整理事業などに対して事務費や建設費を援助するために使われます。

★普通会計とは?

他市町村との比較に使います。市町村ごとに会計の範囲が異なり、財政状況の比較が困難なため、統計上用いる会計区分です。

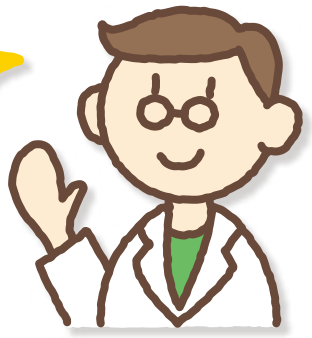
藤沢市の普通会計は、一般会計と3つの特別会計(墓園事業費、北部第二(三地区)土地区画整理事業費、柄沢特定土地区画整理事業費)です。

❷ 義務的経費が年々増えてきています。

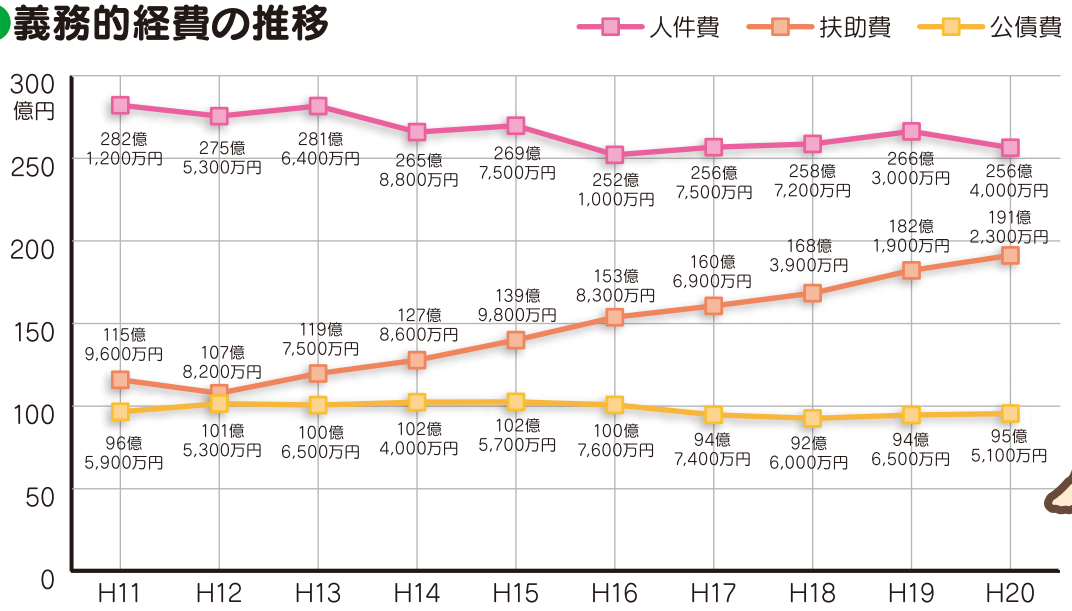
人件費、扶助費、公債費は毎年の支出が義務づけられ節減することが難しいため「義務的経費」と分類されます。

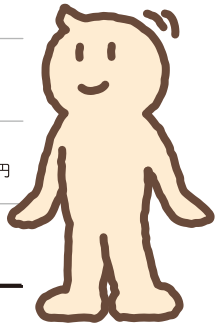
義務的経費の割合が高くなると自由に使えるお金が少なくなり、新しい市民サービスや公共施設の建設などが難しくなります。

それでは義務的経費の10年間の推移を見てみましょう。



●義務的経費の推移



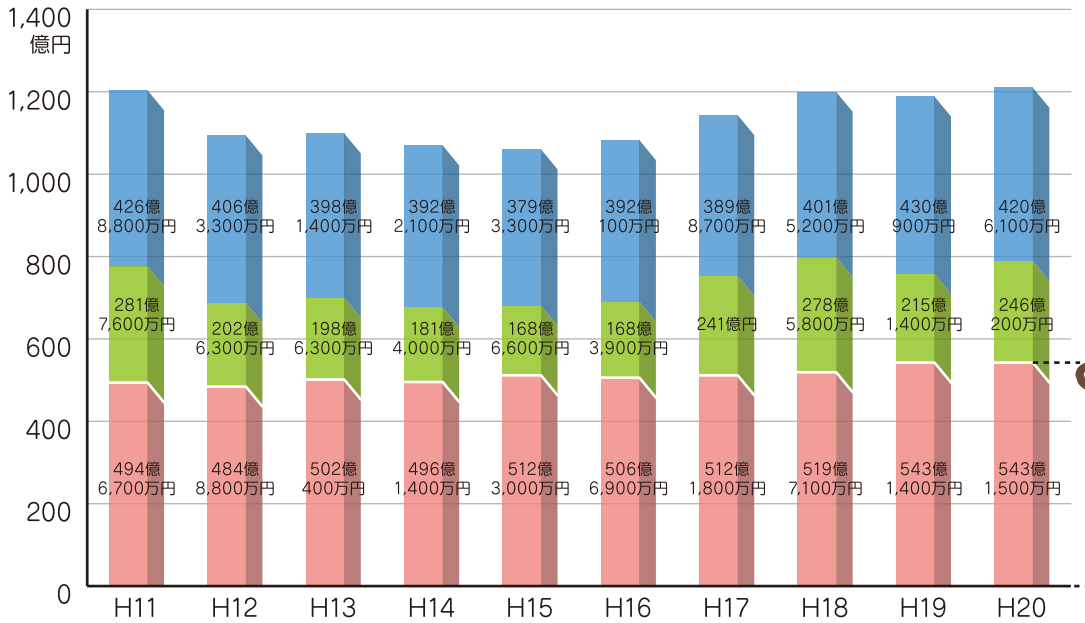


人件費は平成10年度をピークに、増減はありますが定員削減などにより減少してきています。

扶助費は10年間で約75億円(65%)増加しました。平成12年度は介護保険事業がスタートして減少しましたが、それ以降は毎年平均で10億円ずつ増加しています。

公債費は、10年前より減少していますがほぼ横ばい状態です。

●歳出全体に占める義務的経費の割合



義務的経費は10年間で48億円(9.8%)増えました。歳出全体に占める割合で比較すると、3.8ポイントの増加です。

③「経常収支比率」は台所事情をあらわします。

★経常収支比率とは?

自由に使えるお金がどのくらいあるかがわかります。

社会経済や市民ニーズの変化に的確に応えていくための財源がどの程度確保されているかを示します。

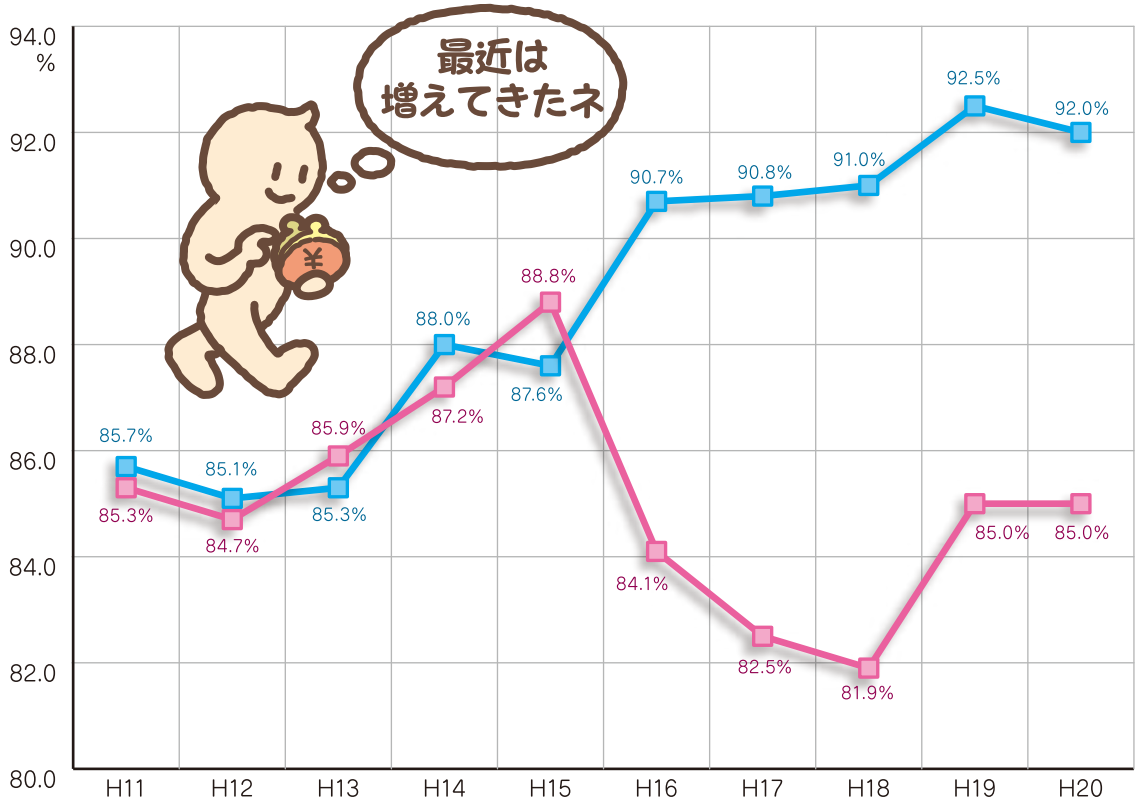
算出方法は、

$$\frac{\text{毎年度経常的に支出される経費に充当された一般財源}}{\text{毎年度経常的に収入される一般財源}}$$

です。

給料に占める食費やローンの返済額の割合と同じで、比率が低ければ自由に使えるお金が多くなります。

●経常収支比率の推移

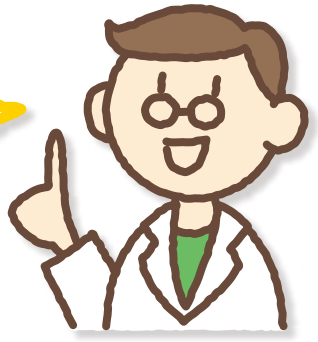


都市部では70～80%程度が望ましいと考えられています。80%を超えると財政構造の弾力性が失われつつあると言われていますが、大多数の市が扶助費や公債費などの増加により80%を超えています。

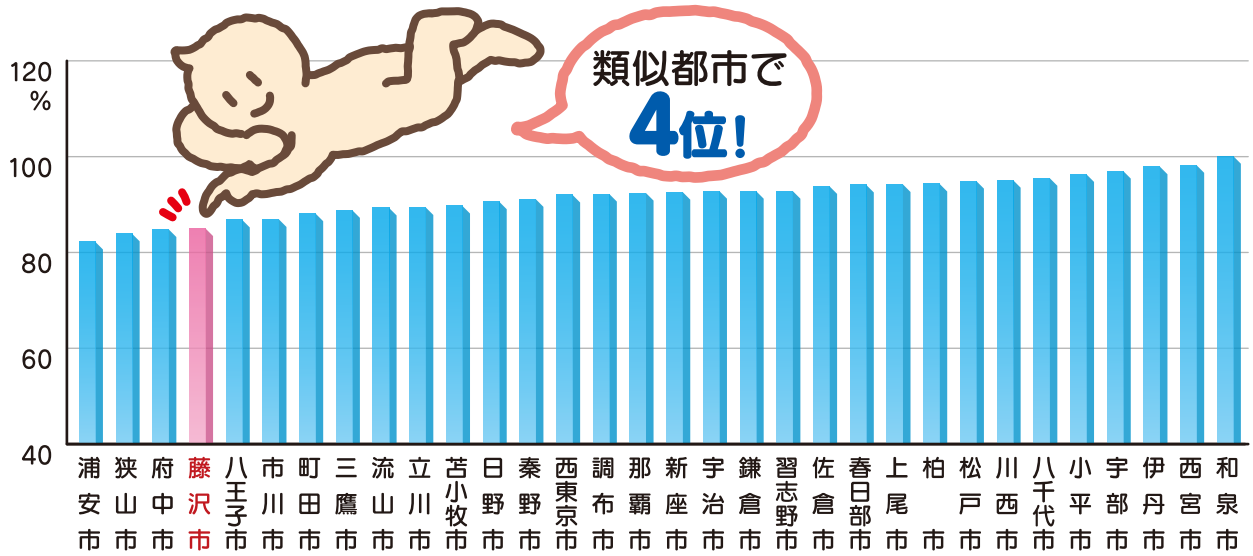
藤沢市は平成15年度に88.8%まで上昇しましたが、その後臨時財政対策債の発行や市税等の増収により81.9%まで低下しました。平成19年度以降は臨時財政対策債の発行額を抑えたため85%まで上昇しています。

★一般財源とは?

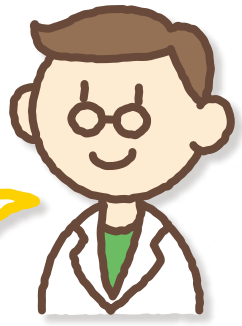
使い道が特定されない何にでも使える収入のことです。主なものに市税、国からの譲与税、赤字債である臨時財政対策債などがあります。



●平成20年度経常収支比率 類似32市比較



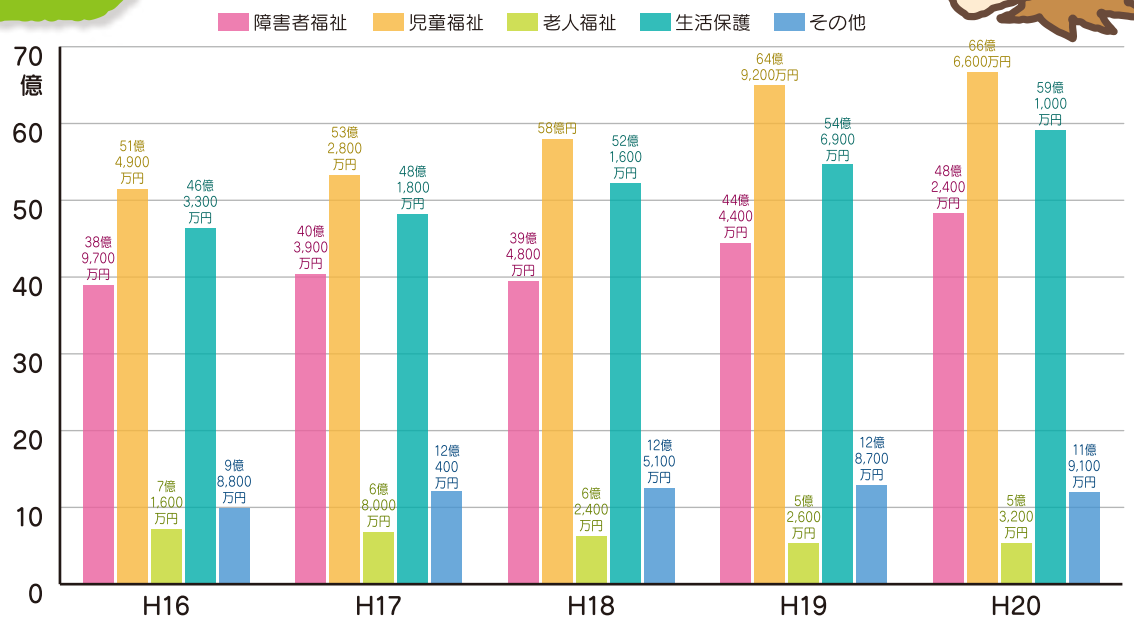
人口や産業構造が類似している上記32市中4位、横浜市と川崎市を除く県内17市中2位となっています。



経常収支比率から藤沢市の台所事情をみると、「給料はあまり増えないのに毎月の支払額は着実に増えてだんだん厳しくなってきている。でも平均的な世帯よりはまだ余裕がある方だ。」というところでしょうか。

ここでひと休み

扶助費は何が増えているのでしょう?



子ども、生活困窮者、障害者に対する扶助費が増えています。5年間でいずれも20%を超える伸び率です。特に児童福祉費は29.5%増となっています。